生涯学習情報紙
ら・ら・ら
Life Long Learning

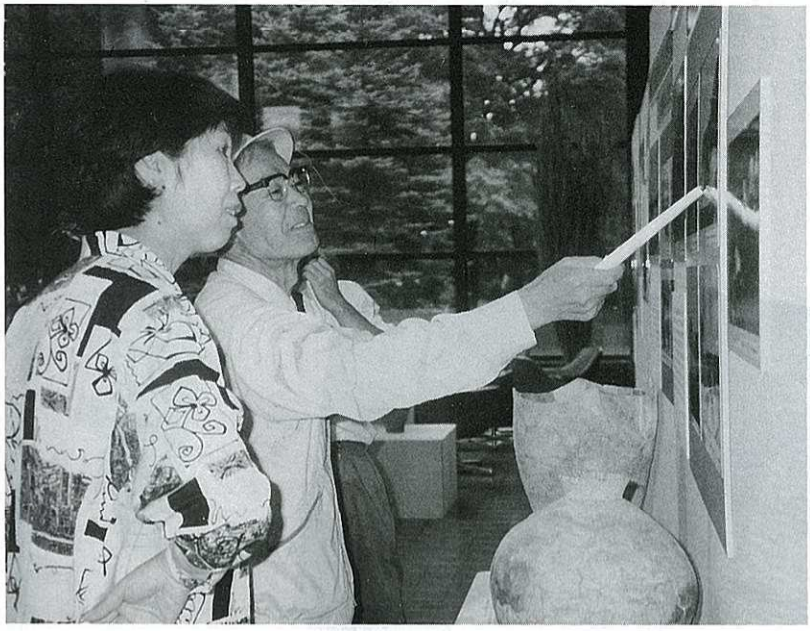
第12号
発行日 平成10年12月1日
発行者 江別市生涯学習推進協議会
編集人 広報小委員会（太田佳美）
連絡先 江別市教育委員会生涯学習担当
〈高砂町24・381－1062〉

働く人びと 汗と笑顔と
第四回生涯学習フェスティえべつ

四回目となる今年のフェスティバルは、9月9日～27日まで屯田資料館、野幌公民館、郷土資料館、大麻公民館の市内四会場で「ふるさとの写真&土器展〝働く人びと〟」を開催し、延べ千人の来場者で賑わいました。

明治から昭和三〇年代までの労働にスポットをあてた六〇点の展示写真は、歴史資料として市で保管していたものほか、市民から提供されたものです。その中には、当時の人々、そしてまちの表情がそのまま記録されており、来場者からは「懐かしい」「もしかして、この子は私かも」などの声も聞かれ、話題が尽きません。まちの歴史を身近に感じることができたのではないでしょうか。

また、郷土資料館との共催により、同館所蔵の江別出土の土器と「江別土器の会」の作品もあわせて展示され、注目を集めておりました。


「歴史を伝える集い」のメンバーによる解説も好評でした。

アジアと日本を考える
～生涯学習講座おわる～

9月30日から10月28日まで毎週水曜五回連続で開催した生涯学習講座には、毎回五〇名の市民が野幌公民館に集まり熱心に受講しました。

生涯学習推進協議会と江別市民国際交流協会が共催した講座の全体テーマは〝アジアと日本〟です。大学教授を中心とする講師により国際貢献、民衆運動、経済など、多面的にアジアの現状と課題を認識し、さらに日本に課せられた役割を学びました。

その中で、第二回目の講師殿平善彦氏は、自身の主宰する「日韓共同ワークショップ」での活動の紹介をとおし、日韓の交流の在り方について語りました。同ワークショップは平成九年から日韓及び在日韓国・朝鮮の若者が寝食をともにし、歴史について考えようと開催しているものです。

昨年、朱鞠内ダム建設で強制労働の犠牲者となった朝鮮人と日本人の遺骨発掘調査を行い、その様子がスライドで紹介されました。笹やぶから遺骨を掘り出す瞬間の写真は歴史上の事実を生々しく物語っておりました。また、発掘のあとテントの中で夜通し語りあう若者の姿はアジアの将来あるべき姿を写しだしているように思えました。

今年は韓国で強制労働従事者や元従軍慰安婦に聞き取り調査を行ったワークショップですが、「今後も正しい歴史認識を持ちつつ、自由な論議をしていきたい」と語る講師は受講者の共感を集めました。

各回のテーマ及び講師は以下のとおり。①国際貢献とアジアの発展・北大教授　梶原景昭／②民衆運動にみるアジアとの連帯・空知民衆史講座事務局長　殿平善彦／③アジア経済と外国人労働者・北大教授　宮本謙介／④マスコミとアジア報道・札学大名誉教授　本間富雄／⑤アジアの世紀と日本・北海道教育大札幌校助教授　袁克勤（敬称略）。

アジアの一員としての日本は、日本人は、いまなにを考え、なにをすべきか。

寄稿

日々楽しむ私の生涯学習

竹内　廣美さん

檜の舞台への夢

ごく身近な人が和太鼓を主宰していたのにまったく興味も持たなかった私ですが、子供たちが「バチ」を持った瞬間から興味を持ち始めた自分に、今では不思議な気がします。

大麻西公園に古タイヤ、竹、樽などを持ち込み、太鼓の練習とはとてもいえない活動を始めて一〇年を迎えようとしています。太鼓を「和太鼓道」と位置づけ、夢中で指導を始めました。会員の子供たちも少しづつ増え、今では四〇余名を数える大所帯の会になりました。

十人十色といいますが、子供の顔がそれぞれ違うようにその子に合った指導をするという技術を持ちえない私は、毎日が勉強でした。

当時、若衆太鼓の名もそれほど知られていませんでしたが、徐々に活動も増え、その活動も地元江別市、地方、道外と活発になり、なんとか太鼓の仲間に入れて頂けるようになりました。夢だと思っていた「全国太鼓フェスティバル」に出場することができたのは、それから五年ほどたった時でした。

私は常々すべての子供たちにスポットをあててあげたいと思っています。私自身、太鼓を通じて素晴らしい人と出会い、多くの事を教えられました。「太鼓は心でたたくんだよ」そして「いつか東京の国立劇場に行って本当の檜の舞台に立ってみたいよね」と、いつも子供たちに話しています。いつかこの夢を星につなげよう、と念じている毎日です。

（北海若衆太鼓代表）

お母さん、しっかり覚えてね（市教委・青空子どもの広場）

福内智恵子さん

泉の沼のほとりに

転勤を重ねた末に、縁あって終の地として移り住んだ江別朝日町。でも、友人知人のいない淋しさから、少女の頃に手がけていた短歌を思いたち、公民館通いを始めてもう十七、八年の歳月が流れてゆきました。

住まいの近くの泉の沼公園は割によく手入れされていて、春には真鴨が番（つがい）でやってきて雛を孵してやがて水面に遊ばせながら、ひたすら子鴨達を育てています。パンを持ってゆくと喜んでよちよち体を振って寄ってくる。心のやわらぐ風景が雪蛍の舞うころまで楽しめます。

おかげで短歌の素材は身近にたくさんあり、私はこの泉の沼の春秋を詠った歌が多くて、娘が一人立ちした後の明け暮れを短歌によって、この沼によって、随分なぐさめられているような気がします。

十一月、伊豆沼方面へ旅立つ真鴨達とは間もなく別れの季節がやってきます。

鳥達の去っていった沼岸に茫々と立ちつくす枯葦。ひとつ地点にあって、ともに冬をやりすごし、水鳥達の春の渡りを待つのです。木枯しの歌を詠いながら。

石狩平野の片隅の泉の沼、この北国の四季に寄せて―切れば血の出るような―短歌を生涯詠いつづけ、老化防止にも役立てながらいつまでも公民館の歌会に通い続けたいと思っております。

（江別短歌会事務局）

日本語教師

十数年も前だろうか、「日本語教師」という言葉を見聞した時、尋常ではない自分に気付いた。日本人として何をなすべきかを考え始めた頃だと思う。しかし、ここにたどり着くまでには長い歳月を待たなければならなかった。

今、私は「中国からの帰国者」と将来国を担うであろう中国・バングラディシュ・インドネシア・タイ・エジプトの研修生を教えている。理屈抜きに愉しい時間である。とりわけ「教える」「教わる」相互の緊張感がたまらなく好きだ。また、九〇分の教室の準備に莫大な日数を費やすのだが、その作業は自国語の再認識とともに新しい発見と疑問等が泉の如く湧いてくる。そして学ぶ。その過程は私の心をこの上もなく豊かにしてくれるのだ。

反面、活動が思い通りの展開に及ばなかった日には、自分の力量の無さを嘆き、学習者不在の一人芝居を演じていたのではないか、机上の空論ではないか、教授法に王道があるのか等々、一人悩むことは多い。しかし、この種の感情を伴うのは日本語教師に限ったことではないであろう。どれだけそれに情熱が傾けられるか否かが次の駒を進める鍵であると思う。

古賀　和子さん

アナウンサーとして十年、キャンバスと闘い続けた二十年、この二本の木を植えた経験も踏まえ三本目の苗木を育てている。「木」が「樹」になるのを夢見て…。そして日本語という珠玉が世界中に散在し輝きを増すことをも希いながら…。

縁あって江別を訪れた外国人、帰国者とアットホームとは異なる心のふれ合いを大切に想いながら、日本語教師として後の半生を価値ある、意味のあるものにしたいと思っている。

（江別国際センター日本語教師）

会員のプロフィール⑪

江別手をつなぐ親の会

石田文子（事務局長）

江別手をつなぐ親の会は、昭和三二年に知的障害児の親七名が加入して結成され、今年四一年目を迎えました。その間、江別市と近郊に住む障害児者と家族が地域で暮していくために、多くの賛助・特別会員に支えられながら地道な活動を続けてきました。

その積み重ねが少しずつ実を結び、昨年は一般市民の皆様方と関係機関の大きなご支援をいただき、二〇年来の夢が実現しました。

社会福祉法人江翔会の設立が認可され、知的障害者生活施設「えべつ明友荘」を開設することができたのです。自分が生れ育った地域で暮したいとの願いのとおり、五〇名の方々が生活しています。

また、家族と暮しながら仕事に通う方々のために当会が運営している「なでしこ共同作業所」は、平成四年に新設のふれあいワークセンターに移転させていただきました。明るく整った施設設備に恵まれ、在宅者にとってかけがえのない働く場となっています。年々、所員の技術も向上し、仕事も増え、利用希望者も多いため、既にスペースが足りない状況で、今後どうニーズに応えるかが課題です。

大切にして　本人達の声

これらのことはこの一〇年間の大きな成果です。

今、私たちは講演会の事業を終え、会員研修会の準備をしながら、二月に行なう「成人を祝う会」の計画をたてています。「私たちに関することは私たちを交えて決めてください」との本人たちの声を大切にしながら、丁寧な活動をこれからも続けていきます。

現在、正会員数は一九〇名にもなり、その輪は少しずつ広がっていきます。

〈事務局〉TEL FAX 386-5783（石田）

笑顔もこぼれる、なでしこ共同作業所

一生勉強　一生青春

～第３回えべつ老年の主張大会報告～

市長賞の浅井昊さん

急激な社会の変化の渦は高齢者にも及び、今後は高齢者自身も社会の現役として地域社会に参画することが求められています。『第３回えべつ老年の主張大会』は、このような趣旨のもと、テーマを“子や孫に伝えたいこと”とし、高齢者がもつ知識や経験を若い人たちに伝えることについて考えました。10月15日㈭市民会館で開催された大会では、約600名の聴衆をまえに、貴重な経験、知識、社会活動の実践や夢が発表されました。

今回は、市内在住の65歳以上の方33名から原稿の応募をいただき、当日は事前選考により選出された７名が発表しました。応募された原稿からは、それぞれに、いま自分のもっていることを次世代に伝えなければならないという意欲をうかがうことができました。

人生80年時代となり、社会が複雑化・成熟化し、だれもが社会に対応する学習を求められています。高齢者も時間と経験を生かし、地域での仲間づくり、まちづくりに参加し、学習するなかから「生きがい」と時代に適応できる「能力」を見いだすことができるということを参加者の主張から学びました。

結果は、市長賞・浅井　昊さん、教育長賞・近藤栄子さん、老連会長賞・柳原恒夫さん、優秀賞・永上シナヲさん・佐藤勝美さん・宇佐見貢さん・金子桂次郎さんに決定しました。なお、この７名の主張は、後日、大会集録として発刊いたします。

高いレベルの講義で気分は大学生そのもの

開放します「学びたい」人に！

北女大・北女短大生涯学習センター

北海道女子大学・同短期大学部生涯学習センターは、地域の生涯学習の場として、平成三年に「浅井学園オープンカレッジ」として開設し、平成九年に「生涯学習センター」と改めましたが、おかげさまで八年目を迎えることができました。これも皆様の深いご理解とご支援によるものと感謝申し上げます。

当センターの主な活動として、一般市民を主とする教養講座、公開講座、講演会、学生を主とする実力講座、各種検定試験等、年間約一〇〇講座を大学の施設を開放して行っています。本学講座では、一般市民が学生と一緒に肩を並べ学ぶ姿がたくさん見られ、またそれを毎回楽しみにされている方も少なくありません。

当センターでは、今後さらに高まっていく生涯学習へのニーズを的確にとらえ、市民の皆様とともに生涯学習社会を築いていきたいと考えております。

〈講座などのお問い合わせ〉同大学生涯学習課☎387-3939

メンバー募集

〈MOA美術文化サークル〉

みなさん、自分のために何か始めてみませんか！美しいお花に触れながら楽しみつつ、しらずしらず心ゆたかになっていく。時には、お花をいけた後に抹茶を頂きながら語らいをする。そんな交流の場にきて楽しんでみませんか。お待ちしています。活動日は教室によって異なりますので詳細は丹野さん（381－3122）まで、お気軽にどうぞ。

編集部では、この「メンバー募集」コーナーへの掲載希望団体・サークルを募集しています。381-1062までご連絡ください。

私の宝物

思い出ノート

小林真知子

それは、数冊のノート。若い頃は人並に日記をつけていたが、就職、結婚と続くうちにいつのまにか書くことは生活の中から消えていた。

大麻に越し、長女が三才を過ぎた頃から図書館に通い始め、その記録をかねて読書ノートを書くようになった。やがて長男が生れ、今度は育児ノートを始めた。ミルクの時間、おしっことうんちの回数、昼寝の時間、離乳食など一日に半ページを記した。一才位まで毎日続き、その後は再び、私と娘、息子の読書ノートとなった。

全部で七冊残っている。その中から思い出の本を一冊ずつ選んでみよう。娘の本では幼稚園の頃に読んだ「きょうはなんのひ」で、まみことという女の子が両親の結婚記念日をなぞなぞ形式の手紙で祝う内容の本である。これが気に入って自分なりに文を変えて手紙を隠し、それを捜すゲームに何回もつきあわされた。娘が字を覚える契機となった本である。一方、息子は「はたらきもののじょせっしゃ、けいてぃ」が大好きで、三・四才の頃、雪道を歩く時はいつも自分がけいてぃの役目を果たした。「よろしい。私についていらっしゃい」と言って片足を雪の中につっこみ、ちゃっちゃっちゃっと歩くのである。

今、娘は二一才、息子は一四才となり親の手を離れつつあるが、これらのノートをひろげると彼らの幼い時の姿が現われ、小さな手が本をめくるのを見る想いがするのである。

（大麻元町在住）

ご案内

市内学習ポイント⑩

第二中学校特設スケートリンク

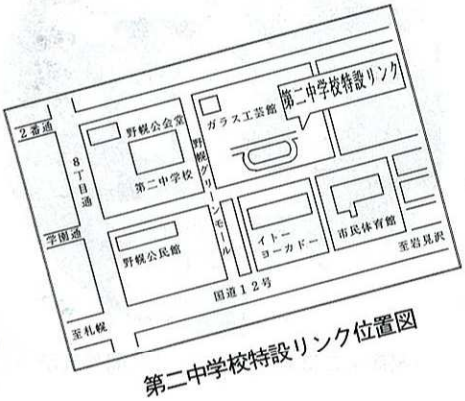
毎年1月上旬からの開設を目指してスケートリンクを造成し、学校体育や市民の教室で親しまれてきました。利用人員が約二万五千人、リンクは三ヵ所という時期もありましたが、近年は残念ながら利用者が減少し「第二中学校グラウンド特設リンク」（一周二〇〇m）の一ヵ所になってしまいました。

しかし、新春の『初心・初級者教室』には、例年、留学生をはじめあらゆる年齢層から参加者があり、札幌スケート連盟指導員の指導で、手近で気軽にできるスケートを楽しんでいます。

今年の冬は、ぜひスケートリンクへおいでください。

一月上旬オープン予定で、時間は午前9時～午後7時30分です。

〈連絡先〉青年センター☎383-1221

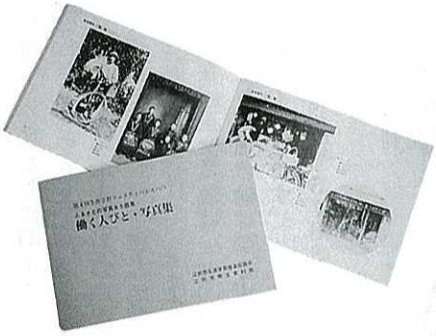


第二中学校特設リンク位置図

懐かしの情景を一冊に

「働く人びと・写真集」発刊

本紙一面で紹介した「ふるさとの写真&土器展〝働く人びと〟」は、九月をもって成功裡に終了しました。協議会では、この展示をより多くの人に見てほしい、記録に残し後代に伝えたい、と展示品をすべて収録した写真集を発刊しました。展示写真のほか、歴史資料となる二四点を付加した計八四点の写真と展示した一〇点の土器、さらにわかりやすい解説を加え、内容を充実させました。



汗みずくの労働

一例を紹介すると、おけ職人や線路上の石炭拾い、洋服の仕立屋、馬耕、担い売り、れんが女工、産婆さんなどなど、今ではすっかり姿を消し去った「働く人びと」が当時の活気とともによみがえってくるようです。

また、市内のアマチュア写真家である高橋繁彦氏をはじめ、多くの市民から提供された写真は、まさに生活の記録であります。そこには力強い男たち、負けず劣らずたくましい女たち、成功を夢見る若者たちの姿がありありと写しだされています。

歴史的資料、民俗学的資料としてはもちろんのこと、当時を忍ぶ思い出話し、あるいは苦労話しのアルバムとしても楽しめるものと思います。

さらに、この地における最初の労働の証しともいえる土器もあわせて収録しております。残部僅少となりましたので、ご希望の方はお早めにお求めください。

○

◆価格　1500円（税込）
◆規格　A4判・72ページ
◆販売　事務局（市教委生涯学習担当）及び郷土資料館
◆詳細　事務局☎381-1062

古銅鉄容器問屋（S30年代・高橋繁彦氏撮影）

編集後記

右の「古銅鉄容器問屋」の写真、すばらしい笑顔です。高度経済成長の原動力となった労働者の力を感じます。「現代っ子」といわれる世代の私には、当時の生活は実感できませんが、今回の写真展から多くのことを学びました。

技術革新、高度情報化の波間に漂う毎日ですが、「働く人びと」の一人として笑顔で仕事をしたいものです。